

関係も防災のインフラである：台湾・日本の地域実践、フィールドワークと学生の学び

林怡資

国立暨南国際大学 共通教育センター・水沙連人文イノベーションと社会実践研究センター
兼任助理教授
yitzu0830@gmail.com

一、台日連盟が開いた「機会の窓」

2024年、台中で開催された第6回台日連盟「新実践」シンポジウムで、私は初めて高知太平洋学園の伊藤創平先生（以下、伊藤先生）に出会った。私の発表が終わると、伊藤先生が話しかけてくださり、私たちはそれぞれが関心を寄せている防災の課題について話し始めた。そして、会場の照明が消され、スタッフが会場の片付けを始めたことで、ようやく二時間近く話し続けていたことに気づいた。懇親会の会場へ向かう車の中でも、対話は途切れることがなかった。誰も、この出会いが後に埔里と高知をつなぎ、継続的に発展していく防災教育交流の道になるとは思っていなかった。今振り返ってみると、それはおそらく、私たちがそれぞれに、まだ解決されていない地域の課題を抱えていたからなのだと思う。

国立暨南国際大学が位置する埔里は、1999年の921地震の被災地である。私にとって、921地震は決して研究や授業の中だけにある一つの歴史ではない。私は地震によって親しい人を失った経験から、防災教育の道にも入っていった。これまで私は、921地震を実際に経験した世代が少しずつ高齢になり、学生たちは皆、地震の後に生まれ、彼らにとって921地震がすでに「歴史」になっていく中で、問い続けてきた。この地域がかつて経験した災害、その中で語り継がれてきた物語、積み重ねられてきた知識や、互いに支え合ってきた経験を、どのように次の世代へつないでいくことができるのだろうか？

高知が向き合っているのは、また異なる「災害の時間」である。日本の多くの防災教育は、神戸や東北のように、実際に大きな災害を経験した地域から発展してきた。一方、高知が向き合っているのは、周期的な発生が近づいているものの、まだ起きていない南海トラフ巨大地震と津波である。埔里が考えているのは、すでに起きた災害を単なる歴史にしないためにはどうすればよいかということだ。それに対して高知が向き合っているのは、まだ起きていない災害をどのように理解し、災害が起こる前から備えを始めるかということである。

伊藤先生は、「太平洋学園は、災害が起こる前に防災を専門的に学ぶ学校です」と話してくださった。その背景には、学校が持つ特殊な経験がある。太平洋学園では、主に不登校を経験した生徒や、異なる学び方を必要とする子どもたちに寄り添っている。伊藤先生は、防災は生徒たちが交流に参加するきっかけとして、とても適したテーマだと話してくださった。この言葉は、今でも私の中に残っている。防災は、地震や津波、避難について学ぶだけではない。子どもたちが誰かと協力し、もう一度学びの場に入り、自分は「何もできない存在」

ではないと気づくきっかけにもなり得る。伊藤先生は高知大学を卒業し、大阪出身でありながら、その後高知に残って仕事をしている。私たちの協働は、高知大学の大槻知史教授、そして本学科技学院の陳皆儒院長、土木工学系および人社センターとのつながりにも広がっていった。しかし、これらは最初から決められていたものではない。一度一度の対話、相互訪問、そして学生たちのニーズへの応答を重ねる中で、少しずつ台湾と日本をつなぐ防災教育交流の道が形づくられていったのである。台日連盟が私たちに開いてくれたのは、単なる一つの会議での出会いではなかった。それはむしろ一枚の「窓」のようなものだった。その窓を通して、埔里と高知がそれぞれ抱えていた課題を、互いに見つめることができたのである。

二、日本から台湾を見つめ直す：人類学を防災の「まなざし」にする

私は約13年間、防災教育に携わってきた。土木工学の訓練を通して、私は工学的な技術や方法を学び、土木工学の視点から物事を見ることを身につけてきた。一方、人類学は私に、防災が向き合っているのは決して災害そのものだけではなく、リスクの中で暮らしている

「人」なのだということを教えてくれた。2025年2月、私は初めて高知大学が開催するSpring Schoolに参加した。それは、津波リスクの高い高知県須崎地域をフィールドとしたワークショップであり、当時、私は自分の共通教育科目を履修していた学生一人を連れて参加した。

そこで私は、このワークショップが地域行政や地域のさまざまな学校をどのようにつないでいるのかを目にした。また、ワークショップを継続して開催することが、地域に異なる思考や視点をもたらす刺激になっていることも知った。異なる国、学校、専門分野を背景とする人々が地域に入り、地域の課題について話し合い、そして「自分たちには何ができるのか」をともに想像していたのである。ワークショップの最後に、大槻先生から学生たちに向けて、総合的なアドバイスをしてほしいと依頼された。私は、これまでの研究や実践を通して少しずつ形づくられてきた自分の方法を、三つの言葉に整理した。

Be an Insider——内側の人になる。

Be an Outsider——そして、外側の人になる。

Do What You Can Do——自分にできることをする。

「内側の人になる」とは、地域に近づこうとすることだ。最初から答えを持って地域に入るのではなく、まず人々がどのように話し、どのように感じ、その土地の時間の流れをどのように捉え、自分たちが暮らす環境をどのように見ているのかを理解しようとする。こうした経験は、必ずしも質問をすれば直接答えが得られるものではない。時には口を閉じ、自分の身体で感じ、耳を傾ける必要もある。外から来た者には、そこは「津波の脅威にさらされている低地」に見えるかもしれない。しかし、そこに暮らす人々にとっては、「家」であり、「仕事」であり、「家族」であり、「一生をかけて暮らしてきた場所」なのかもしれない。

人は、自分の暮らす場所に長く住んでいるほど、道路や空間、生活習慣、人との関係に、かえって気づかなくなることがある。だからこそ、外から来た者の立場は、当たり前だと思われるものをもう一度見つめ直すきっかけになる。それは、その地域の大切な特徴かもしれないし、これまで気づかれてこなかった問題かもしれない。

「再び外側の人になる」というのは、私たちがフィールドに入るとき、必ず自分自身の視点や専門的な見方を持っているということでもある。地域の人々を理解したからといって、自分の考えを捨てる必要はない。そこで、自分の専門分野の方法が、地域の人々にとって当たり前となっている日常に、別の視点をもたらすことができる。

そして最後が、「自分にできることをする」ということである。私たちは専門知識を持って地域に入ると、すぐに問題を見つけることができる。しかし、本当の地域実践とは、すべての人の困難を自分が解決できると宣言することではない。自分の立場から、継続的に寄り添うことができ、同時に他者の生活の境界を越えない行動を見つけることである。学生であっても教師であっても、自分ができる位置から、できる限りつながりを築いていくことができる。

人類学の参与観察やフィールドワークの方法が、防災研究に与えてくれるのは、一つの「正解」ではない。むしろ、答えを出す前に、いくつかの問いを増やしてくれるのである。「私はどこに立っているのか?」、「私は誰の視点から、この問題を定義しているのか?」、「私が良いと思う方法は、ここで暮らしている人々にとっても、本当に良い方法なのだろうか?」

こうした問いは、人類学だけのものではない。Spring Schoolでは、都市計画を専門とするイタリアのRizzi教授も学生たちに、どのような空間計画や政策設計であっても、図面や人口、コストだけを見ることはできず、実際にそこで暮らしている人々を理解しなければならないと話していた。ある計画が地域に受け入れられるかどうかは、利用者がその空間をどのように理解し、どのように使うのか、そして変化によって何が失われ、何が残されるのかによって決まる。私が出会った日本の工学系の背景を持つ防災専門家たちも、地域に入る際にはフィールドワークを行っていた。そして、その始まりにあるのは「聴くこと」であり、まず地域の人になることから始めていた。

三、一枚の絵の中にある答え：安全のほかに、人は何を失うのか

Spring Schoolの期間中、Rizzi教授は学生たちに、直接的でありながら、とても挑戦的な問いを投げかけた。日本は少子高齢化に直面しており、海辺の集落では人口が少しずつ減少し、住民の高齢化も進んでいる。それならば、なぜ政府は、住民が残りの人生を安心して暮らせるだけの十分な費用を提供し、より安全な場所へ移住してもらうという方法を取らないのだろうか。その問いへの答えは、実は当時のフィールドノートの中に、私自身が描いた一枚の絵として残っている。あなたには、その答えが見えるだろうか？

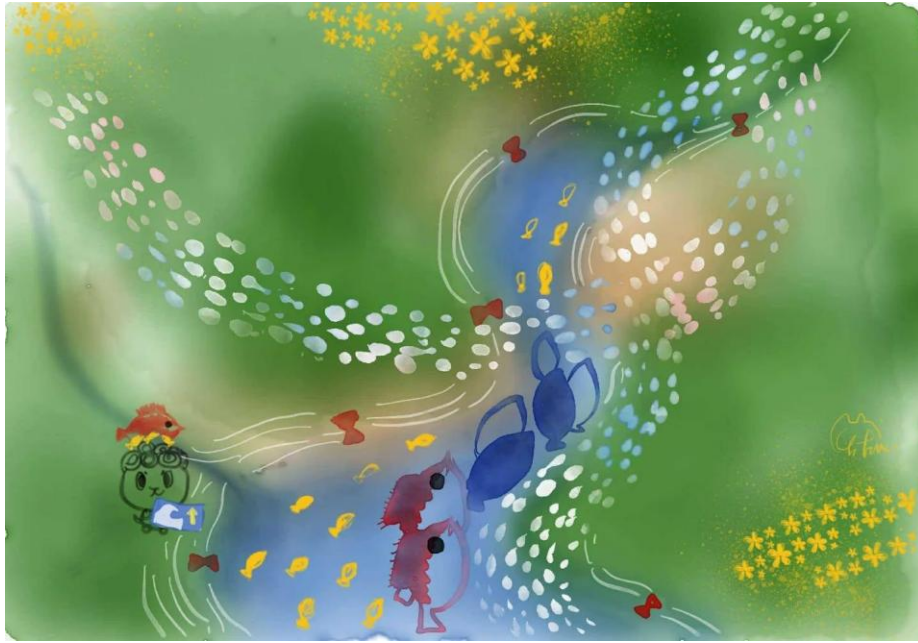


図1 須崎でのフィールドワーク中に描いたスケッチ（林怡資作）

「なぜなら、彼らは漁師だからです。」Rizzi教授がそう話したとき、私は学生たちの目に浮かんだ驚きを見た。私の絵の中には、須崎の海岸、海流と魚群、そして地域のマスコットである「しんじょう君」が描かれている。そこに描かれているのは、津波が到達するのを待つ危険区域ではない。豊かな魚と美しい海があり、人と海がともに暮らしている場所である。

この海には、確かに津波のリスクがある。しかし、漁師にとって海は、仕事であり、技術であり、季節であり、時間感覚であり、そして自分自身のアイデンティティの一部でもある。須崎で、地域の方から「刺身はその日に獲れた魚でつくる」と聞いた。地域によっては、二、三日前の魚でも刺身と呼ぶことができるかもしれない。しかし、ここでいう魚は「今日の魚」でなければならない。それは単に鮮度を求めているということではない。海や季節、漁獲のリズムとともに暮らす一つの生き方なのである。だからこそ、海を離れるということは、慣れ親しんだ仕事の方法だけでなく、長年にわたって蓄積してきた知識、互いに支え合ってきた関係、そして自分が育ってきた故郷を離れることを意味する。

災害リスクの高い地域では、外部から「なぜ彼らは引っ越さないのか」と問われることがある。この言葉は、住民を「リスクへの意識が低い人々」として理解してしまう可能性がある。しかし、人類学や利用者の視点から、もう一度問い直してみると、問題は次のように変わる。「なぜ彼らはここに住み続けるのか?」、「海は、危険であること以外に、どのような意味を持っているのか?」、「もしここを離れたら、何を得て、何を失うのか?」もちろん、防災の目的は命を守ることである。しかし、命とは単に呼吸し、生存することだけではない。その人が慣れ親しんだ生活、関係、能力、そして尊厳を保つことができるかどうか、命の一部なのである。漁師にとって、残りの人生を過ごすために十分な費用を提供することは、経済的な問題を解決することはできても、「生活」の問題に答えることにはならないかもしれない。

これこそが、現在、防災教育を進める際に、利用者の視点を理解しなければならない理由でもある。どれほど高度な技術や空間計画であっても、人々の理解を必要とする。計画が地理的な安全だけを扱い、生活をどのように継続していくのかという問題を扱わなければ、たとえ技術的にも財政的にも実現可能な計画であったとしても、地域に本当の意味で受け入れられない可能性がある。阪神・淡路大震災や東日本大震災後の復興の経験もまた、空間計画が人間関係や生活の継続を十分に扱えなければ、新たな孤立や疎外を生み出す可能性があることを私たちに教えている。こうした経験を通して、私は、「内側の人になる、そして外側の人になる、自分にできることをする」という三つの言葉が、抽象的な研究上のスローガンではなく、一つの実践の順序なのだと、より強く確信するようになった。まず、その地域の人々がどのように暮らしているのかを理解する。次に、専門的な視点から見えるリスクや可能性を提示する。そして最後に、互いに受け入れられるところから変化を始める。専門知識は、私たちに方法を提案する力を与えてくれる。しかし、他者を理解することによって初めて、その方法が実際の生活の中に入り込む可能性が生まれるのである。

四、交流を実践へ：教師同士の対話から世代を越えた共同参加へ

私と伊藤先生との出会いは、私たち二人の間だけにとどまらなかった。2025年、高知で開催された台日連盟のシンポジウムでは、私たちはさらに、両校の交流を防災教育をテーマとした共同発表へと発展させ、高知大学の姉妹校や龍谷大学のパートナーとのつながりも深めていった。もともとは個人と個人の対話だったものが、大学、高校、中学校、そして地域の間へと広がる関係になっていったのである。

2025年、私は共通教育科目の学生一人を連れて高知のSpring Schoolに参加した。同年5月には、嘉義県中埔国中の生徒たちも高知を訪れ、交流を行った。2026年には、陳皆儒院長の指導を受ける二人の学生と、私の共通教育科目を履修する学生一人が再びSpring Schoolに参加し、須崎の地域の現場に入り、地域を体験し、議論し、そして防災ゲームをデザインした。同じ年、嘉義県義竹国中と豊山実験教育学校の生徒たちは、「大手牽小手」——大学生・大学教員と中高生、あるいは小学生がともに学ぶ交流——に参加し、互いに寄り添いながら学んだ。そして今年度は、太平洋学園の生徒たちも埔里を訪れ、地域の災害防救ボランティア隊、集集国小、そして紙教堂のある地域を訪問した。防災をきっかけとして生まれた、さまざまな世代と地域の交流は、互いの訪問、理解、そして学びを通して、ともに進められている。



図2 中学生と高知の生徒・教員が須崎避難タワーで記念撮影

大学生は、もはや教師について地域を訪問するだけの存在ではない。ワークショップの一員として参加し、次第に高校生や中学生に寄り添う存在となり、文化の翻訳者となり、そして学びをともにつくる協働者となっていく。教師が始めた関係の中に、異なる世代の新しい位置が生まれ始めたのである。私たちは国際交流を子どもたちに届け、子どもたちに海外へ行って異なる世界を見てもらう。しかし、私たちが本当に行っていることは、子どもたちが別の地域に入り、そこで他者の暮らしを見ることを通して、もう一度、自分自身の地域を見つめ直すことなのではないかと思う。そして、普段は身近ではない人や物事が自分の日常の中に入ってくることによって、自分自身がそこに存在していることにも気づくことができる。



図3 Spring Schoolにおける大学生の須崎公民館での発表（林怡資撮影）

五、学生の目を通して見る、交流が本当に残したもの

交流後の振り返りや共有は、学びの重要な足跡である。中学生、高校生、大学生を問わず、私たちは学生たちの変化を見ることができた。

ある交流に参加した中学生は、振り返りの中で次のように話していた。「最初は、防災というのは、地震が起きたら防災訓練をすることだと思っていた。でも日本に行ってみて、みんなが本当に真剣に防災に取り組んでいることが分かった。津波の避難体験をして、日本の防災に対する真剣さを感じた。」また、日本の学生との交流を通して、自分が表現できる言葉で相手と交流することの大切さを実感した学生もいた。さらに、日本の学生たちが自分の暮らしている地域をよく知っている姿を見て、「自分の故郷にはどのような特色があるのだろう」と考えるようになった。こうした答えは、必ずしも「レジリエンス」や「防災」といった言葉を直接使っているわけではない。しかし、子どもたちがすでに防災を地域の暮らしと結びつけて考え始めていることを示している。別の学生は、海外に行ったからこそ、ゆっくりと立ち止まる時間ができ、街のきれいさや建物の美しさを感じることができた。そして台湾に戻って初めて、自分の故郷もこんなに美しかったのだと気づいたという。国際交流とは、単に「どの国がより進んでいるのか」「どの国がすごいのか」を比較するためのものではない。本当の学びとは、他者を見ることによって、もう一度、自分自身を知り直すことなのだと思う。

現在の台湾の子どもたちにとって、921地震はすでに歴史である。一方、高知の学生たちにとって、南海トラフ巨大地震は、まだ起きていない未来の災害である。両地域の学生たちは、似たような難しさに向き合っている。「自分自身が経験したことのない災害を、どのように理解するのか？」単に知識を増やすだけでは十分ではないかもしれない。しかし、子どもたちが地域に入り、別の地域の学生たちと出会い、相手が自分の暮らしやリスクについてどのように語っているのかを聞くことで、災害はもはや遠い場所にある抽象的な言葉ではなくなる。

大学生の成長は、また別の道筋に現れていた。2026年にSpring Schoolに参加した学生たちは、須崎でフィールドワークを行った後、地域住民の意見を取り入れながら、将来の図書館で使用する防災ゲームをデザインした。彼らにとって最も難しかったのは、ゲームのルールを考えることではなかった。インタビューを通して聞いた地域の経験を、どのようにデザインの中に取り入れるかということだった。「ゲームとして楽しめること」と「地域の課題を単純化しすぎないこと」の間で、彼らは何度も調整を重ねた。台湾に戻った後、学生たちはこの経験を同年6月の「非常防災」読書会へと持ち帰り、「高知から始める：防災もゲームとしてデザインできる？」というテーマで、フィールドワーク、ゲーム開発、そして交流の過程で考えたことを発表した。地域に入り、住民の声に耳を傾け、そして自分たちの経験を他者に伝えるために前に立つ。その過程を通して、学生たちは少しずつ理解していった。防災ゲームとは、単に人々に「正しい答え」を覚えてもらうためのものではない。それは、異なる立場、選択、そしてリスクに対する理解を言葉にし、互いに議論することのできる空間をつくるものなのだ。このような学びの軌跡は、私が提案してきた考え方——「まず内側の人になり、次に外側の人になり、最後に自分にできることをする」——とも重なっている。



図4 2026年Spring School参加者による集合写真

六、活動の成果から「関係の成果」へ：関係も防災のインフラである

計画や交流の成果は、しばしば活動回数、参加人数、アンケート結果、学生たちの作品などによって示される。もちろん、こうしたデータは重要である。しかし、この二年間の交流を通して、私はもう一つの、よりゆっくりと進み、数値化することが難しい成果にも気づいた。活動が終わった後も、学生たちはもう一度戻ってきて経験を共有しようと思うだろうか。教師たちは次の協働について話し合おうと思うだろうか。地域のパートナーたちは、この関係をこれからも続けていこうと思うだろうか。こうしたことは、統計表の中に簡単には入らない。しかし、それこそが、次の活動を再びゼロから始めなければならないのか、それともこれまでの積み重ねの上に続けていけるのかを決めるのである。

2024年の始まりに、私たちの間には一枚の「協働の設計図」など存在しなかった。ただ、防災という課題に共通の関心を持っていた。その後のSpring School、大学生の交流、二度にわたる中学生の交流、「大手牽小手」、高校生の埔里訪問、そして読書会——これらは、最初から計画表に沿って一つずつ実施されたものではない。一つの行動が次の行動を生み、信頼の積み重ねが、さらに次の協働へとつながっていったのである。活動の成果が答えるのは、「私たちは何を成し遂げたのか」という問いである。一方、関係の成果が答えるのは、「活動が終わった後も、誰がこの先を一緒に歩いてくれるのか」という問いである。

この視点から考えると、大学は地域実践や国際交流において、研究や資源を提供するだけの存在ではない。人と人との出会いを生み出し、互いの間をつなぎ、そして関係が続いていくことを支える役割も担っている。ここでいう「翻訳」とは、中国語、日本語、英語といった言語の間の翻訳だけではない。異なる国、世代、学校制度、そして地域の経験の間で、互いを理解するための橋渡しをすることでもある。人類学の参与観察とは、二つの地域を並べて順位をつけることではない。他者を通して、自分自身をもう一度見つめ直すことである。日本における災害経験の保存や継承の方法は、台湾において、どのように記憶を日常の中へとつないでいくことができるのかを、私に改めて考えさせてくれた。一方、台湾で災害後に迅速に形成される助け合いの力は、社会的なつながりが持つ、もう一つの力を私たちに見せてくれる。

防災について考えるとき、まず思い浮かぶのは、防災設備や避難場所である。これらは欠かすことのできない基礎インフラである。しかし、災害が起きたとき、その地域が実際に行動できるかどうかは、互いに信頼関係があるか、これまでに一緒に何かをしてきたか、そして困ったときに誰に助けを求めればよいのかを知っているかどうかにもかかっている。こうした関係は、平常時には必ずしも目に見えるものではない。しかし、それはまるで一本一本の見えない道路のように、情報や資源、そしてケアを流通させる。須崎の漁師との対話は、私に「安全は外側から一方的に定義することはできない」と教えてくれた。学生たちのまなざしは、「本当の学びは、教師があらかじめ設定した方向にだけ進むものではない」と教えてくれた。そして伊藤先生との出会いは、「多くの重要な実践は、完璧な計画書から始まるのではなく、二人の人間がまず座り、互いにしっかりと話をするところから始まる」のだと教えてくれた。

関係が教師から学生へ、大学から中学校へ、そして台湾から高知へと広がっていくとき、そこに支えられているのは、もはや一つの国際交流だけではない。それは、未来の災害にともに向き合うための、一つの力なのである。

関係は、防災実践の傍らに添えられた温かな物語ではない。また、活動が終わった後に残る「おまけ」の成果でもない。**関係そのものが、防災の基礎インフラなのである。**